

風来山

イラスト kero介

GenoCide+Reality

Story by huuraisan

Illustration by
kerosuke



ジェノサイドリアライティ

異世界迷宮を最強チートで勝ち抜く

特別試読版

異世界迷宮を
最強チートで
勝ち抜く!!

「小説家になろう」超王道!!

書き下ろし短編2本収録!!

GA文庫

孤独な少年がダンジョン深く潜る異世界最強ファンタジー!!



プロローグ PROLOGUE

仄暗い松明の灯りの下でも、錆びたショートソードの
剣先からどす黒い血が滴っているのがハッキリと見えた。
猫背で錆だらけの凶刃を構えるその姿は、子供ぐらい
の背丈の小鬼。

皺だらけの肌をしたモンスター。
そう思って、つい笑ってしまう。

化け物だと？

だが、これは現実だ。

ゴブリンと俺おれの間には、絶叫しながら石畳の床を転がり回っている男子生徒がいる。

腹をショートソードで刺されたのだ。まだ死んではないが、おそらく命に関わる重傷。

瘦やせぎすのゴブリンは、死にかけている男子生徒を突き刺すのを止やめて、今度は俺に血の滴る凶刃を向ける。

「キキキキ……」

老ろうば婆のような醜い顔のゴブリンは、子供のように甲高かんだかい声で笑った。赤く濁った眼が、俺を捉える。

ショートソードが繰り出される。

——殺やらなきや、殺られる。

そう思った刹那せつな、もう俺の耳には刺された生徒の泣き

叫びも、周りの戦鬪の音も聞こえなくなっていた。
静寂の中で見えるのは、目の前の『敵』だけだ。
手に握った掃除用モップの柄えを強く握り締める。

「うおおお！」

俺は渾身こんしんの力で、ゴブリンの頭にモップを振り下ろす。

「ギイツ？」

ハッ、何だこいつ。怯おびえてやがるのか？

ゴブリンの頭を狙ねらった俺の一撃は見事に空振りだった。
相手の肩に浅くかすっただけ。

だが、俺の気迫に敵が圧されて、逃げ腰になったのを
感じた。流れが変わった。

そうだ、殺らなきや殺られる。

「俺は、殺る側だ！」

見掛け倒しの雑魚^{ざこ}め。

殺りにきておいて、自分は殺られないとでも思ってたか。
小鬼のモンスターと俺は、身体能力でさほど差がない。
上背はこちらのほうが勝ってる。

そして何より、敵が持っているショートソードに対し
て、俺のモップは倍のリーチがある。

この差は、圧倒的。

再び、渾身の力をこめてモップの柄を、屈^{かが}んだ小鬼の
頭^{たた}に叩きつける。

グニユツと、小鬼の柔らかい頭部が砕ける感覚。
頭を叩き割られた小鬼は、「ギャツ」と悲鳴をあげて

その場に倒れた。

これで終わり？

まだだ。確実に殺らなきゃな。

俺は、もう一度モップを振りかぶって小鬼の頭部に思
いつきり叩きつけた。

緑色の頭は、腐ったキャベツみたいにグシヤリと砕け
散って、床に汚らしい体液をまき散らした。

「……ハッ、ハア」

詰めていた息を大きく吐き出して、口内に湧^わいてきた
唾液を飲みこむ。心臓は、早鐘のよう^{のうしやう}に打ち続けている。
砕けた頭から、緑色の脳漿^{のうしやう}をまき散らして倒れている

小鬼の化け物は、完全に死んでいる。

俺が、殺った。

もちろん殺したのは人間ではない。俺を殺そうとしてきたモンスターだ。

しかし、人の形をした生き物を潰した感触と死体から立ち上る独特の腐臭は、吐き気を催す後味の悪さを感じさせた。

喉^{のど}が渴く。

だがそれ以上に、不思議な感動が胸に湧き上がる。目の前で死んでいる敵よりも、俺は強かった。だから勝って生きている。

叫びだしたくなるほどの激しい愉悦があつた。

俺はついさっきまで普通の高校生だったのに、なんで

こうなっただったか。

そんな微かな思かすいが俺を追憶へと誘おうとするが、目の前の危機的状況は感傷に浸ることを許してはくれない。

「キヤアア、また来たあ！」

傍かたわらの女子生徒があげた悲鳴。

俺達を皆殺ジェノサイドしにしようと狙うモンスターの一団が、もう石置の通路の奥からやって来ている。

それが今の現実リアルならば、考えるのは後回しだ。

まず目の前の敵を全て潰すしかない。

無心になった俺は、手に構えたモップを強く握りしめて、次の瞬間にくるであろう戦闘を待ち受けた。

——殺せ！ 奪え！ 生き延びたければ、誰^{だれ}よりも強くなるしかない。

そうだ。俺は誰を殺してでも絶対に生き残る。

最後まで勝ち続けて、このジェノサイド・リアリティーを骨の髄まで味わい尽くしてやる。

薄暗いダンジョンに響き渡る禍々^{まがまが}しい化け物どももの咆哮^{ほうこう}と、立ち向かう生徒達の怒号と悲鳴は、いつ果てるともなく続いていた。

突然の集団転移

CHAPTER 1

事の始まりは、教室で起きた地震だった。

教室全体が揺れ始めて、斜め前の席の女生徒が耳障りな金切り声をあげたので、本を読んでいた俺おれは不愉快だった。

地震ごときで騒ぐなよ。

大した揺れでもないだろ。お前ら、何年日本人やつてるんだ。

そう思ったが、一向に騒ぎは収まらない。

一年F組、狭い教室ですし詰めにされている三十人の高校生があげるざわめきは、地震よりもよつぽど騒がしい。

国語教師の浦部^{うらべ}が、ようやく「みんな落ち着いて、机の下に隠れなさい」と叫んで、みんな思い出したように机の下に隠れて静かになった。

これで、読書に集中できる。

そう思ったが、揺れは激しくなる一方で、本を読むのは無理だった。

「じゃあねえ」

本を閉じて、机の上に置く。

読もうとして本を読めないのは不快だったが、俺以外

全員が机の下に隠れている光景は思ったよりも爽快だった。

「ふん、悪くはない」

幾分か、陰鬱いんうつな教室の空気もいつもより風通しが良くなつたように思える。

奇妙なほど長く続く不気味な揺れは激しくなる一方で、ときおり机の下から漏もれてくる悲鳴も段々と静まってきた。

本当に危機を感じた時は、押し黙るというのが生物の本能なのかもしれない。

黒い埃ほこりが落ちてくるので見上げると、天井てんじょうから降ってきていた。

古い校舎だから、そのうち埃だけじゃなく蛍光灯や窓ガラスが割れて、俺に降り掛かってくるかもしれない。

そうになったら死ぬかもしれないとは、理性でわかった。

だが俺が死ぬこと自体、本当にどうでもいい。だから、他の奴^{ほか}みたいな机の下に隠れようとも思わない。

死ぬって、くそったれな俺の人生が終わるだけのことだろ。そこには、何の意味もない。

「全部つまらんことだ」

今死んだとしたって、唯一の心残りは今読みかけているハンナ・アレントの『責任と判断』が最後まで読みきれなかったことぐらいか。

そんな思いすら、死ねば即座に消え失せるだろう。

なるほど、この非日常に感じる奇妙な爽快感の正体はそれかと、今さら気がついた。

目の前の現実が全てリセットされたら、せいせいするってものだ。

俺だって死にたいわけじゃないが、生きることにする理由もない。

そんな半ば悟ったような気分で、俺は椅子いすの背に身体からだを預けた。

そのうち揺れの性質が変わり、もはや激しい揺れは地震ですらなくなり、エレベーターで降りていくような、足元がふわりと浮く不気味な浮遊感に変わる。

まるで、教室ごと奈落の底へと落ちていくような感覚

に身を委ねるうちに、俺の視界は闇に覆われた。

一瞬、目の前の世界が暗転して、本当に死んでしまったのかと思ったが、ただ蛍光灯が消えただけのことらしい。

それにしたって真昼間から、教室が暗闇に沈むとはおかしいが。

「なんで真っ暗になったの？ 誰か何とかしてよ」

「電気、誰か電気つけろ！」

暗闇の中、困惑した生徒達が呼び合う声とともに、闇の中に、ポツ、ポツといくつか明かりが灯る。

そうだ。

みんなスマートフォンという便利な光源を持っている。
俺も、学生服のポケットからスマホを取り出す。
灰^{ほの}かに点^{とも}る明かり。画面のロックを外して、まず確認
したのは、携帯の電波。

圏外……。

これでは、何の災害なのかネットで調べることにはでき
ない。それどころか、救援すら呼べない。

いくら災害でも、街なかにある学校で電波が届かなく
なるなんてあるだろうか。

あるいは、さっきの不気味な落下の感覚が正しいとす
るなら、地面に大穴でも開いて教室ごと落ちてしまった
のかもしれない。

そうなる、いきなり真っ昼間から暗闇になっただけのも説明が……。

「いや、そりゃないか」

エレベーターだって、ロープが切れて落下すれば箱の中の人間は無事では済まない。

俺の席は、後ろの窓際だ。

落下の衝撃があれば、窓ガラスが割れてないはずがない。

スマホに映る時刻は、午前十一時二十六分。あれほど長く感じた地震は、たった五分程度のことだった。

携帯から拾える情報はもうなさそうだ。

何気なく、外を確認しようと窓の外をスマホのライト

で照らして、俺は驚いた。

「なんだこりゃ……」

目の前のものが信じられなくて、窓をガラリと開けて
直接手で触れてみる。

窓の外は、びっしりと石に覆われていたのだ。

「いきなり暗くなったのは、このせいかな……」

真っ暗闇になったのは、俺達の教室が石壁で囲まれた
せいだったのだ。

ゲームのダンジョンじゃあるまいし、石の中にいるな
んて、冗談にもならない。

これはちよつと笑えない、少し頭が冷えた。

「しかし、石壁ってふざけてやがる」

何度触つても、石壁は石壁のままだった。

ゴツゴツした石は、磨かれたようにスベスベとしていて、少しひんやりとしている。

「とりあえず、動くか……」

俺はまず、靴を上履きから机の脇に掛けてあつた体育館シューズに履き替えた。

上履きよりこっちのほうが断然動きやすい。

「おい、なんで蛍光灯が点かないんだよ、どうなつてんだ！」

まだ石壁に閉じこめられたことに気がついてない愚かな男子生徒が、明かりのスイッチをカチカチ押ししながらそんなことを叫んでいた。

「どうなっただよ」なんて、みんなが知りたいことだろう。

だが男子は「どうなっただよ」の大合唱だ。もちろん聞くだけで、答えられる奴はいない。

「なんなのよこれー、もうわけわかんない。誰かなんとかしてよー」

暗闇で誰が誰だか見分けもつかないが、女子の中には泣き出してしまっているものもある。

全くうるさい連中だ。泣き喚^{わめ}いて事態が好転するなら、いくらでも泣けばいいんだけどな。

教師が騒ぎを鎮めてくれればいいんだが、教師自体も困惑しているようで「とにかくみんな落ち着きなさいー!」

としか言えてなかった。

落ち着けと言って、落ち着く高校生ガキがいるものか。

「先生、こういう時はクラスで纏まとまって校庭に避難するべきではないでしょうか？」

みんなが騒ぎ立てている中に、落ち着いた声が響き渡った。おそらくいつもF組で取りまとめ役を引き受けている級長の女子の声だ。名前はなんだっけ、たしか竜胆りんどうって妙な苗字みょうじだったか。

災害時に纏まって避難するのは、発想として至極真つ当なものだ。

少なくとも防災訓練ではそういうルールだ。こんな状況でも、少しは冷静に頭が回る女子もいるんだなと思っ

た。

その竜胆級長の問いかけにも、教師は頼りない。

「いや、しかし勝手に避難して怪^け我^が人でも出たら責任問題が……そうだ、こういう時には避難誘導の放送があるはずだから、まずそれを待とう」

自分が責任を負わない方法だけ考えて、モゴモゴ口を動かしている。

つまらん授業しかできない教師だと思っただが、やはり頭が悪い。蛍光灯の点かない時点で放送なんてできないことを理解しろよ。電気が切れてるんだぞ。

「先生、お願いですからしつかりなさってください！」
「だがそういつてもな……ああそうだ。ここは、他の先

生方とも相談しよう。そうしよう……」

本来、生徒を統率すべき教師がこの体たらくでは、騒ぎも収まるまい。

そもそもこんな教師に連れられて避難するなんて御免なので、それについてはどうでもいい。

クラスのアホどもも勝手にしたらいい。こういう時、信じられるのは自分の判断だけだ。

俺は俺で、勝手にやらせてもらおう。

他の奴は放っておいて、まず教室の外に向かおうと、スマホのライトアプリを起動させる。

注意深く、足元を照らす。

激しい揺れのせいか、一部の机が横倒しになり、中身がぶち撒^まけられてひどい有り様だ。ロッカーが倒れて、これも中身が飛び出している。さっきの激しい音はこれか。

俺は、床に落ちている掃除用具のモップを一本拾った。何が起きるかわからない状況において、得物があれば何かと役に立つかもしれない。

ロールプレイングゲーム
RPGなら、『真城^{しんじょう}ワタルはモップを装備した』とでも出てくるところだ。

「遊んでる場合じゃないか」
冷静にならなきやと思う半面、この非日常感にちよつと心が浮き立つ自分がいた。

「さてと……」

無能教師や、泣くだけのクラスメイトを無視して、床に散乱した物を踏まないように気をつけながら薄ぼんやりと明かりが漏れる廊下に出てみる。

ガラリと引き戸を開けて、絶句した。

教室の外には見慣れたはずの廊下がなく、石畳の通路になっていた。

それが、見渡す限りずっと続いている。

初めて見る異様な光景だが、俺は強烈な既視感デジャビユーを感じた。

「マジで、RPGのダンジョンかよ」

床も壁も石のブロックで構築されている。時間に磨か

れたたつるりとした石の光沢が、本物の洞窟だけにある重厚感を感じさせる。

廊下から漏れていた光は、松明^{たいまつ}の炎だっらしい。石の壁に等間隔に鉄の金具が設置され、そこに燃え盛る松明が立てかけられていた。

手に持ってみると、木の棒の先に布が巻かれているのがわかる。布に可燃性のものを染^しみこませて、それを燃やしているわけだ。煙には鼻にツンとくる独特な強い匂^{にお}いがある。人工物ではなく、松脂^{まつやに}の松明なのだろうか。

こんな物を、誰が……？

石の廊下も、古ぼけた鉄の金具も、まだ真新しい松明も、誰かが作らない限りは存在しない。

学校の廊下が突然何かの遺跡か、あるいはダンジョンの通路に変貌してしまった。

石の通路を目を凝らして眺めると、点々と松明の灯り^{あか}が見えた。

誰か知らないが、ご丁寧にきちんと照明を用意してくれているらしい。

「……だから、誰かって誰だよ」
自分でツツコミを入れてみる。

もしそんな誰かがいるとすれば、今回の異変を画策した人物ということになるか。

ダンジョンと表現するしかないこの人工建造物に、松明の灯り。少なくとも、自然現象でこうなるとは思えな

い。おそらく何者かが何らかの意図を持ってこうしたと考えるべきだろう。

俺達に恨みを持った奴か、あるいは……。

まあでも、今それを考えても仕方ない。情報だつてま
るでない。

こんな状況でまずやるべきことは……。

「探索に行くの、真城くん？」

俺の思考を、涼やかな声が遮さへぎった。

「なんだ……瀬木せきも出てきたのか」

どこの美少女が来たのかと思ったら、俺と同じクラス
の瀬木碧みどりだった。

勘違いしないように言っておくが、瀬木は歴とした男



子生徒だ。

詰襟つめえりの学生服に身を包んでいても、女子が男装してるようにしか見えない顔立ちなので、いちいち断っておかないと紛らわしい。

鮮やかに青みがかって見えるセミショートの黒髪、中性的な整った顔立ち。化粧もしてないはずの生白い肌は、今時のケバい女子高生よりよっぽど美少女だ。

そんな瀬木は宝石のような美しい瞳ひとみをしていた。松明の灯りに照らされて、黒目がちの虹彩が緑がかって見える。その瞳の色から、碧なんて、女みtainな名前を付けられてしまったと、いつか話してくれたことを思い出した。

「うん、真城くんが、出ていくのが見えただから……追いかけてきたんだよ」

「この暗闇で、よく俺が動いたのに気がついたな。眼がいいんだな」

瀬木の瞳は、美しいだけでなく観察力も鋭いらしい。追いかけてきたのが瀬木だったのは幸運だった。クラスその他の連中なら誰一人として連れて行きたくないが、瀬木ならば一緒に行くのもアリだろう。

「誰でも見えるわけじゃないんだけどね」

ブカブカの学生服の袖を^{そで}口元に押し当てて話す瀬木。その足元を見ると、ちゃんと上履きから体育館シューズに履き替えていた。

地震でガラスが割れたりして、危険がある可能性を想定したんだろう。普段は大人しく温厚で、女子よりも可愛らしく見える瀬木だが、その実鋭い注意力を持っていて頭が切れる。

その美少女ぶりを見ていると男子つてところに「はてなマーク」が付くけど、できる奴には違いない。連れて行けば役に立つこともあるだろう。

「このまま教室にいても埒が明かない。廊下の先を調べてみようぜ」

「真城くんがそう言うなら行くのは構わないけど……大丈夫かな？」

「大丈夫かどうかは知らんが、教室に留まっても何も

始まらないことだけは確かだろう？」

「そうだね。廊下に出るのも怖かったけど、こうして見ると灯りがあるだけ教室よりマシみたいだしね」

おっかなびつくり周りを見回す瀬木を尻目しりめに、もう片方の手で松明を取ると、廊下を見据える。

石畳の通路は、廊下だった時と同様に、教室の扉から出て左右に分かれていたが、まずは左側にある隣の教室を確認してみることにした。

俺のクラスはFクラスだから、左に進むとE、D、Cといった順に教室が並んでいる。

教室の前を通り過ぎ、まずは隣のEクラスの前まで進んでみた。

通路はひんやりとした空気が満ちていて、まるで本当のダンジョンのようだ。

そんな折、隣のクラスからも生徒がゾロゾロと出てきた。いつまでも教室でグダグダしていたF組と違って、E組は集団で纏まって避難することを選択したらしい。ただ、避難するといつてもどこに行けばいいのかって話もあるが。

「おい、これどうなってるんだ？」

E組の見知らぬ男子生徒が、先に通路に出ていた俺と瀬木に聞いてきた。

「そんなの俺達が知るかよ」

「チツ……お前らの持つてる松明はどこで手に入れた

んだ？」

「通路のそこら中にあるだろ。それを一つ取っただけだ」

「確かにあるな。でもこれじゃまるでダンジョンじゃないか。一体どうなってるんだ？」

だから、知らないって言うてるだろ。

話をしていると不安になるのか、妙に馴^なれ馴^なれしく絡^{から}んでくる。

俺の持った松明に興味津々だったE組の男子に、他の男子が声を掛けた。

「おい、F組のアホ相手にしててもしょうがないだろ。それより先生が一旦^{いったん}集まれってよ」

アホで悪かったな。

こつちだって、E組の集団を相手にしててもしようがないので、無視して通路を先に進む。

うちの高校、優凜学園高等部一学年は、六クラスある。A、B、C、D、E、Fと、入試の成績順で振り分けられているわけだ。

おっぱいのサイズでいえばFが最高だろうが、残念ながら成績ではAが一番上で、俺と瀬木がいるF組が最低だ。

うちの高校は県下でも有数の進学校なので、F組でもそこまでバカってわけではないが、やはり校内でもヒエ

ラルキーというものが厳然とあつて、F組は見下される。

F組は進学校にもきちんはんぱと存在する不良（しかも気合の入つてない中途半端な連中）とか、事情があつて留年した者とか、単純に俺のような不真面目まじめな生徒もいるごつた煮のようなクラスだ。

瀬木は生まれつき身体が弱く、入試後のクラス分けテストの時に体調を崩していたそうだ。そうでなければ、たぶんもつと上のクラスだっただろう。

そんなことを考えながら石畳の通路を突き当たりまで進むと、一年の教室はA組からF組まできちんそろと揃つていた。

「ここで、行き止まりか」

本来ならこの廊下が下駄箱げたにつながっていて外に出られる玄関があつたのだが、石で覆われてしまつていた。ここに存在するのは一年A組からF組までの教室だけだから、それ以外がどうなっているかは知る由もない。二年や三年の教室や、他の棟にあつた職員室などはどうなつてるんだろう。

瀬木は、本来なら外に繋つながる通路があるはずの石壁に触れて、考えこむように眩つづやく。

「外には出られないみたいだね」
「ああ、そうだな」

A組の前にあつたはずの昇降口が潰つぶされた。突き当たりの石壁を隅々まで調べて、浮かない顔をしている瀬木

の気持ちはわかる。

先にこっちを見にきたのは、もしかしたら外に出られないかという期待もあつたのだ。

「今回の事件は事故だと仮定しても不可解な点がありすぎるね……」

「同感だ。ただ、今そのことを考えても仕方がない。どうせ何もわからないんだからな」

何らかの判断を下すにしても情報が足りなすぎる。来た道を引き返して反対側の探索を進めようと言おうとしたところで、こんな時にあまり会いたくない人物と出くわしてしまった。

「あっ、もしかしてワタルくん？」



薄闇の中でも、松明に照らされる彼女の輪郭から、俺にはすぐに誰か判別できた。

艶^{つや}やかな長い黒髪に、二重まぶたのつぶらな瞳。

やたら整った気品のある顔立ち。背丈はやや低くほっそりした身体だが、揺れる薄紅色のプリーツスカートと白いセーラー服がよく似合っている。

うちの学校の女子の制服は白っぽいから、暗闇でも目立つ。

「瀬木、逆の廊下を行ってみよう」

何とか気が付かなかったことにして、そのまま引き返そうとしたのだが、回りこまれてしまった。お前は、RPGに出てくるモンスターか。

「ああっ、ワタルくん！ 無事でよかったわ。真っ先に私の下に駆けつけてくれたのね。さすがは私の王子様ね」

「別にお前に会いに来たわけじゃねえよ……」

一年A組の副級長。九条^{くじょう}久美子^{くみこ}だ。

久美子は成績で総合学年二位をキープしている、A組でもよりすぐりの優等生だ。おまけに、家柄もよろしい九条家のお嬢様。見ての通り、かなりの美少女でもある。その優秀さは、一年生なのにその才覚を囑望されて生徒会役員も務めているほどだ。

ちよっと小柄なところはマイナスだが、スレンダーな体形にアイドル並みの整った顔立ち。

こういう見た目が美しくて清楚せいそなお嬢様はモテる、だから久美子は学校でもファンが多い。

外目だけ見たら、まさに理想のヒロインだろう。しかし、俺は理由があつてこいつのことを苦手としている。そもそもF組で劣等生の俺と接点なんてありようもない高スペック女子なんだが、ひょんなことから俺はこの清楚なお嬢様を気取っている久美子の本性を知ってしまった。

それ以来、なにかという絡まれて付きまとわれる日々が続いている。

クラスが違って幸いだっただと思える程度に、ことあるごとにまとわりついてくる久美子の存在はうっとおしい。

外見通りのお淑しとやかなお嬢様なら良かったのだが、やたらベタベタと絡んでくる女は苦手だ。

「来てくれてありがとう。私、すごく不安だったの……」

「うるせえ、お前に会いに来たわけじゃないって言うるだろ」

俺の抗議も虚むなしく、久美子は思いつきり俺の身体を抱きしめてきた。温かい体温と柔らかさを感ずる。瘦やせてほとんどないように見えるくせに、胸の柔らかい感触がしっかりとあるのは反則だ。

腕にわざと胸を押し付けてきているのだとしたら相当な策士だ。この異常事態のさなか、それどころじゃない

とわかってるのに、久美子の長い髪からはいい匂いがするし、女に抱かれた感触を心地よいと感じてしまう男の性^{さが}に我^{われ}ながらム力つく。

右手に松明、左手にモップの柄^えを持っていたために、俺はされるがままだ。

松明を持っているから危ないと思ってこっちが大人しくしていれば、好き放題しやがって。

調子に乗った久美子は、身を寄せたまま今度は瞳を閉じると、唇を尖^{とが}らせて迫ってくる。

「お前はアホなのか。今はサカってる場合じゃねえだろ」

「あら、サカるなんて下品ね。ワタルくんが助けに駆け

つけてくれて、せっかくお姫様気分だったのに……」

「随分と余裕があるじゃねえか」

「王子様がお姫様を助けだしたら、次はキスの展開って昔から決まってるでしょ？」

こいつ、不安になつていたとか絶対嘘うそだろ。

久美子はちよつと頭がおかしいレベルで肝が座ってる女だから、こんな状況の時にもふざけている。

しかし、久美子。今は本当に遊んでる場合じゃないぞ？

「冗談も大概にしないと、手を滑らせて松明をお前の頭の上に落とすぞ」

「もー、ワタルくんだったら、真剣に怒らないでよ。緊迫

した場を和^{なご}まそうとしたジョークじゃない。私もこんな緊急時に本気でふざけたりしないわ」

こんな時に冗談言ってる段階で完全にふざけてるわけだが、完全に狙^{ねら}って言ってるだろ。

こっちが二の句も継^{あき}げずに呆^{あき}れていると、久美子は急に俺から離れて優等生モードに変わった。

「それで、ワタルくんはこの現象をどう解釈しているのかしら？」

優等生らしいキリツとした顔で、スカートを手で払いながらそんなことを言ってくる。

他の生徒が近くを通りかかったからだ。A組の副級長である久美子は、これでも優等生を気取っているのです、

他人の目があるとまともに戻る。

いつも優等生モードなら、俺も久美子を苦手とすることはないんだが。

「そうだな……地震が起きて、収まったあと、俺達はF組からA組までの通路を歩いてきた。こっちは壁で行き止まり。F組の向こう側は、さらに先があった。確かなことはそれだけだ。あっ、念のために聞くが、A組の教室の窓はどうだった？」

「窓は全部調べたけど、外は完全に石に塞^{ふさ}がれてたわ」
「F組も同じだ。それならたぶん、A組からF組まで全部、窓は石壁に塞がれてるんだろう。解釈するも何も、結局F組の通路の先に行くしか道がないってことだ」

「なるほどね」

九条のお嬢様は、さすがに優秀だ。

おおよそ俺達と同じ思考ルートをたどって教室の外に出てきたのだろうが、調べるところはすでに確認済みで話が早い。

馴れ馴れしい態度や破綻している性格はともかく、この事態でも平然としている度胸と能力の高さだけは認めざる得ない。

それに、窓を全部調べただけ俺よりも注意深く慎重であるともいえる。

「じゃあ、さっそく調査に行きましょう！」

久美子も頭は切れる。役に立たないことはないだろう

から、連れて行くのもやぶさかではないのだが……。

「この状況で腕を絡めて俺の利^き腕を潰すとか、お前本当に状況わかってるのか？」

歩き出して、A組の生徒達と離れてしまった途端にこれだ。

この非常時を楽しんでいるとしか思えない。

「あら、ワタルくんの両手が塞がってるみたいだからモップを持ってあげようと思ったただけよ」

「モップを持つのに腕を絡める必要はないだろ。武器と明かりは両方必要なんだよ」

俺が苛^{いら}々^{いら}してそう言っていると、久美子はむくれた顔で唇を尖らせて、搦^{つか}んだ腕を渋々と離した。ピクニック気分も

いい加減にしろ。

そんなやり取りをしているうちに、いつの間にか教室の外にたくさん生徒が出てきていた。

どこの教室も石壁に窓を塞がれているってことによろやく気がついたんだろう。

普段はA組以外の生徒の前でも猫を被^{かぶ}つて他人の眼をやたら気にしている久美子が、いくらA組の連中が移動したからといって、人前でこんなにはしやぎ回って過剰にスキップを求めることは珍しい。

もしかしたらわざとおどけて見せてるだけで、実はこいつなりに不安がつてるんじゃないだろうか。

それはそれで、ウザいことに変わりはないのだが。

瀬木も俺と久美子の掛け合いを眺めて呆れていた。

こんな状況で久美子に会ってしまったのは本当にアンラッキーだった。A組のほうじゃなく、最初から反対側に行けばよかった。

終わったことを言っても仕方がないので来た道を引き返して行くと、C組の前辺りで各クラスの教師達が集まって善後策を協議しているのが見えた、

俺達が勝手に動きまわっても注意しようもしない。深刻な顔で話し合っている彼らは、どうやらそれどころではないらしい。

こんな状況で大人を頼りにしてもしょうがないので都合だ。勝手にさせてもらおうとF組の前まで進んだ。

F組の前を通り越すと、反対側は石畳で構成された大広間になっていた。

広いこと以外特に通路と変わりはないが、松明の数が多くて明るい。

無造作に先に進もうとする瀬木に、俺は声を掛けた。

「待て、瀬木。そんなにズンズン進むな」

「え？ でも、先まで行くんじゃないの？」

「注意して進めって言ってるんだ。こういう場所でききなり道が広がったら要注意なんだよ」

「それって……RPGみたいに、畏^{わな}があつたりモンスターが出てくるってこと？」

瀬木は慌^{あわ}てて足を止めると、少しおどけた口調でそう

言った。でも全然笑えていなかった。震える口元からは恐怖心が透けて見える。

毘にモンスター。今の状況からすれば、全く冗談になつてない。

「三人もいるのに俺達が持つているのはモップが一本に松明が一つか。素手では心もとないし、念のためもう一度戻って何か武器になるものを探すか」

「ねえ、真城くん。化け物が出るとか、冗談だよね？」
瀬木は自分で言ったことで自分が怯^{おび}えてしまったよう
だ。

全くしょうがない。

「瀬木。お前は観察力があるしいい眼を持っているんだ

から、怖がってないで周りをよく見ろよ。そうすればモンスターはともかく、罾はわかるんじゃないか？」

「そんなこと言われても……えっと確かにあそこら辺の窪^{くぼ}みは少しだけ気になるけど」

瀬木が指差す先、石畳に線が入っているのがうつすらと見えた。ちようど、広間の中央から左端辺りか。

俺も言われないと気が付かなかった。この松明の薄明かりで、よく見えたもんだ。

「やっぱり瀬木の眼の良さは頼りになるな。よし、モツプでその辺りを突つついてみるか」

「えっ、止めようよ。危ないよ」

「ワタルくん、次は私がやるわ！」

俺が瀬木のことを褒めたのが不満だったのか、久美子がサツと俺の手からモップを奪うと、石畳に柄の先で触れた。

こんな時、久美子は行動力がある。止める間もなかった。

久美子が柄で石畳に触れた瞬間、急いで周りに目を配った。毘のスイッチが入ったとして、その場所で作動するとは限らない。

全く別の場所で、何かが起きる可能性もあるわけだ。身構える俺達の前で、カチャリと不気味な作動音が響き渡った。

ガチャンガチャンと音がして、少し離れた場所の石畳

が左右に開く。

どうやら窪みは落^ピとし穴^{ット}のスイッチだったようだ。

「わわ、なにこれ!？」

突然口を開いた落とし穴に驚いた瀬木が、俺に抱きついてくる。

「どんだけ臆病なんだよ」

「……ごめん」

瀬木が頬^{ほお}を赤らめて恥ずかしそうに微笑^{ほほえ}むので、俺も誘われて笑った。まあ仕方がない。

臆病なぐらい慎重なほうが、無謀よりはなんぼかマシだ。

「きゃあああああ！」

瀬木が離れると、俺達の様子を見ていた久美子もわざとらしく悲鳴をあげて抱きついてきた。

無い胸を俺の腕にやたらこすりつけてくる。

こうやって抱きついてくると、艶やかな髪から一丁前にいい匂いがしてくるのがムカつく。

ちなみに瀬木もすげー甘い香りがした。本当に男だよな？

「いや、きゃーって。久美子、お前が罨を作動させたんだろ」

「だって、瀬木くんばかりずるいわ」

「お前はもうそうやって、一生ふざけてろよ」

「うそうそ。真剣に怒らないでよ、謝るから。ごめんな

さい」

「全く……」

いつものやりとりを見てようやく落ち着きを取り戻した瀬木が、俺から少し離れて呟く。

「で、でも……落とし穴って、大した罠じゃなくてよかったよね？」

「いや、大した罠だぞ。落とし穴を舐^なめてたらヤバイことになる」

問題は今開いた落とし穴をどうするかだ。

久美子の前に立って、入念に落とし穴を調べることにした。二重にトラップが仕掛けられていることもあるので注意しつつ、穴の底を松明で照らしてみる。光の届く

範囲から推測するに、だいたい二メートルから三メートルの深さだろうか。

穴の周りを囲んでいる壁は見えない。少し広い部屋になっているのか、もしかしたら下にも通路とかがあつて、そこに通じているかもしれない。

「この穴を降りてみることはできないの？」

久美子が、そう聞いてくる。

危険な発想ではあるが、落とし穴が実は安全な出口つて可能性もないことはないか。

だが、底が見えない落とし穴を降りるのは無謀だ。

床があれば無事に着地できるかもしれないが、一度降りたら今度は上に登る手段がなくなる。そもそも飛び降り

りた先に槍^{やり}が生えている可能性だつて否定できない。

どう考えても、ここを降りるのは危険すぎる。

「ロープでもない限り、下に降りるのは無理だ。お前ら、落とし穴の意味をよく考えろ。この高さからいきなり底の见えないところに飛び降りたら無事じゃすまない。よくて捻挫^{ねんざ}、悪いと骨折するかもしれない。誰の助けも期待できないこの状況で、足を骨折したらどうなる？」

俺の説明を聞いて、瀬木はごくりと唾を飲みこんだ。
降りてみることはできないの？　なんてのんきに聞いてきた久美子ですら渋面になった。

落とし穴と聞くと、バラエティー番組でよく芸人が落とされてるイメージしかないが、本来は動物を狩るため

の殺傷トラップなのだ。

人がマンモスを狩りだした原始時代から、近年のベトナム戦争に至るまで、落とし穴は単純だが効果的に敵を殺す罠だ。

つまり、この罠を仕掛けた奴は、俺達が死んでもいいと思ってるかもしれないってことだ。

「久美子もあんまり先走るなよ。この状況は思ったより危ういぞ」

気丈に振る舞う久美子は、少し無理をしているようにも感じる。

「私はワタルくんのためだったら、死んでもいいよ？」
前言撤回だな。

やっぱりふざけた女が、ふざけたことを言っているだけだ。

俺もふざけて返すことにした。

「ふーん。じゃあ久美子には、俺のために肉壁となつて死んでもらうか」

「そこは絶対死ぬとか、俺が死なせないつて言うところでしょ？　いくら照れ隠しにしても、肉壁になつて死ぬつて返すのは酷^{ひど}すぎじゃないかしら」

怒った顔をする久美子を、瀬木が苦笑いしながら慰める。

「しょうがないよ。真城くんつてそういう人だもん」

「そっか、ワタルくんだもんね。『俺が代わりに命を投

げ出して、君のことを守るよ』とか男らしく言ってくれるのを期待した私がバカだったわ」

急に理解し合って、なんなんだよお前ら。

変な結託の仕方をするなよ。気持ち悪い。

肩をすくめて意味ありげな笑いを交わし合う不愉快な二人に、俺が文句を言おうと口を開きかけたところで。

二人の後ろからワイワイと雑談している緊張感のない集団がやって来た。

「おー、あれ久美子ちゃんじゃね！」

「よかった。九条久美子くん、ここにいたのか」

来たのはA組の連中のようだった。いちいち他クラスの生徒まで覚えていないが、集団の中心になってる男子

生徒には俺も見覚えがあつた。

それにしてもA組の連中は纏まつたと思つたらこつちに來たのか。

教師達が役に立たない状況で、俺達を除けば、自分達で決断してここまで來たわけで、さすがに優等生集団と
いったところか。

「あら、貴方達も來たのね」

冷たい声で呼びかけにこたへた久美子は、澄ました優等生の顔に戻つていた。

ちなみに「九条久美子くん」と張りのある声を掛けた

長身の美丈夫が、七海修一。ななみしゅいち。学年でも最優秀の生徒で、

他人の興味のない俺ですら見覚えがある有名人だ。家柄

は金持ち、眉目秀麗、学年成績は当然のように毎回一位。学業だけではなくスポーツ面でも優秀で、所属しているバスケット部では一年生なのにレギュラーメンバー。

文武両道って奴だな。ここまでは、百歩譲ってまだわかる。

だが、それに加えて一年なのに生徒会長に名指しで副会長に指名されて、学校行事でもリーダーシップを発揮するまでいくのはいくらなんでもできすぎだ。ここまでの高スペックなので、女にモテるかと思いきや特定の恋人はおらず、告白される率はさほど高くないらしい。

男版高嶺の花って奴で、挑戦するのはちよっと勇気が要りそうだ。後はよっぽどの自信家だろう。そう、例え

ば七海と同じ様に、一年生のうちから生徒会に所属している奴とか。

そう思っただけでチラツと久美子に流し目を送ってやるが、そっけなく無視された。過去のことは思い出したくもないのか、反応がなくてつまらない。

とにかく七海修一ってのはうちの学校でも抜きん出た優等生だ。どんな教師よりも頼もしく優秀で、人を率いることに長けた生まれつきのリーダーである。

「よかった。クラスに久美子くんがいなかったから心配してたんだ。んっ、そちらにいるのは、F組の真城ワタルくんと、瀬木碧くんかな」

瀬木はともかく、俺の名前まで呼ばれたのでちよつと

驚く。

「ほう。七海副会長が俺ごときを覚えていてくださったなんて光荣ですな」

なんでこいつ、俺の名前なんか覚えてんだ？

俺が七海修一と話すのはこれが初めてのはずだぞ。

超がつくほどの優等生として目立っている向こうはともかく、俺みたいなF組の生徒の顔と名前まで覚えてい
るとは意外だった。

「これでも僕は生徒会の人間だから、生徒の顔と名前はなるべく記憶するようにしているんだ」

どこまで超人だよ。爽さわやかで嫌味がないのが逆に嫌味
つたらしい。

学校の有名人に声を掛けられて瀬木は喜んでるみたいだが、俺は七海副会長があまり好きじゃない。

七海は、優等生すぎてなんか胡散臭うさんくさいんだよな。

同じ優等生でも、実は面白おもしろい性格の久美子とは違う。

七海に裏がなく聖人君子の部分が真実だとしても、あんまり知り合いにはなりたくないな。

「なんだこれは。ひょっとして落とし穴か？ 一体誰がこんな危険なものを……」

学校一の優等生の七海は、落とし穴を見つけて呟く。
どうやら副会長様も、落とし穴の危険性を理解しているようだ。

「七海副会長。ここは罠があるから、あんまり歩き回ら

ないほうがいいですよ」

便宜上、形だけの忠告はしておく。あとはこいつらが
 どうなろうと知ったことではない。

そつと、瀬木の手を引いて静かにその場を離れること
 にした。

「ど、どうしたの真城くん？」

「いいから黙って、ゆっくりと元の通路に戻るぞ」

なぜか赤くなつた瀬木に小声で指示してから、一応、
 久美子にも目配せしてやる。

久美子もコクンと頷くと、何も言わず付いてきた。

A組の奴らが入ってきた瞬間、俺はここが危ない場所
 になつたと感じた。

なぜならあんなに手の込んだトラップがあつたのに、それが一つであるはずないからだ。

七海率いるA組の連中がどれだけ優秀か知らないが、周りを見ずにダンジョンをズンズン進んでいくのは迂闊うかつすぎる。

罠を作った者の意図がわからないままこんなところを歩き回っていれば、確実に良くないことが起きる。

忠告はした。

あとは、七海達A組のグループが前に出てやらかしたとしても自己責任というものだ。

俺は非情だから、むしろいい実験台になつてくれそうだとさえ思っている。

尊い犠牲に感謝しつつ、俺達だけは災いに巻きこまれないように引かせてもらおう。

そう思うが早いかな、さっそく、誰かが何かを踏んだらしく、ガチャツと音を立てて右側の壁に扉が開いた。

もしかしたら、罠ではなく隠し通路かな？

一瞬そんなことを思ったが、やっぱり罠だったようだ。隠し通路から豚面ぶたづらの顔をした人間っぽい化け物が飛び出してきた。手には武器を持っている！

「あっ、なにあれ？」

シヨ一の着ぐるみとでも思ったか、状況を理解できてない瀬木がのんきなことを言った。

「わからん、とにかく脇目もふらず逃げろ！」

まさか変質者が豚のマスクを被って変装してるってわけでもあるまい。いや、変装しているかどうかなんてこの際どうでもいい。

鈍い輝きを放つ鉦なたやら戦斧バトルアックスやらを手に持って近づいてくる奴らが、友好的なわけがない！

ここが本当にRPG風のダンジョンだとすれば、あれはオークってモンスターじゃないかな。

後ろからようやく七海達の悲鳴が聞こえてくるが、俺は無視して全力で逃げた。

こっちはろくな武器もないのに、刃物を持った敵対的強者と対峙たいじしたくない。

だからここで戦うって選択肢はない。逃げの一択だ。

「うわああああ、あれ怖いよ！ 真城くん、ねえ、あれ何なの!？」

「うるさい瀬木！ 叫んでる暇があつたら全力で逃げろんだよ！」

瀬木はもう泣いているというより叫んでいる。男の子としてはちよつと情けないが、むしろそれが普通か。

女子のくせに、平気な顔をして俺達より前を走る久美子のほうが、どちらかというと異常だ。

一緒にいるのがこんな時に泣き喚く女子でなくて良かったともいえる。

走りながら、久美子が呟く。

「さっき出てきたのって、オークっていうアプリのゲー

ムに出てくる豚のモンスターかしら？」

「久美子。お前スマホのゲームアプリなんかやってるんだな」

優等生なのに意外。

「ワタルくんはいつも私にふざけるなって言うけど、こんな時なのにワタルくんも結構余裕よね？」

「まあな」

奴らが来た時点でなんとなくこんなことになるんじゃないかとは思ってた。悪い予感ほどの中するものだ。

さて、逃げたはいいがいずれは教室の前の廊下は行き止まりだ。

手元の武器は、俺が松明、久美子がモップを持ってい

るだけ。

「このまま逃げ続けても、ギリ貧になりそうだな」

「何とか撃退する手段を考える？」

久美子がそう聞いてくる。

そうだな。

こっちは生徒の数が多いから、誘いこめば何とかなるかもしれない。

「ねえ真城くん。さっきの豚みたいな顔の大柄なのが三人いたけど、それ以外にも鬼みtainな角の生えた緑色の小柄なのが二人いたよ」

「瀬木、お前あれだけビビってたくせに……よく見てた偉いぞ」

走りながら頭をクシヤツと撫なでた。俺に褒められて瀬木は嬉うれしそうな顔をしている。

あの状況で敵の数を把握してるなんて、上出来だ。

こんな時にも冷静な久美子はともかく、臆病な瀬木だけは守ってやらないとな。

俺は松明を握りしめた。

豚面をオークとするなら、小鬼はゴブリンってところか。

全く、本当にRPGの世界に迷いこんだみたいだ。

「瀬木、武器がないなら石でも拾っておけよ。拾って投げれば、それも十分武器になるぞ」

綺麗きれいに見えるダンジョンの石畳にも、よく見ると小石

がちらほら落ちてる。

これで致命傷は与えられなくても、牽制するための飛び道具くらいにはなる。ないよりずっとマシだ。

瀬木の眼を信じるなら、敵はオークが三体、ゴブリンが二体。

バトルが発生する時は戦力把握が重要だ。俺も次があれば気をつけて見ておくことにしよう。

とりあえずC組の教室前まで逃げてきたが、化け物はまだ追って来ない。ここは俺達だけで戦わず、他の生徒に助けを求めるべきだろう。

最悪、肉壁に使えるかもしれないしな。

ークラスに三十人だから、単純計算でいけばここには

生徒が百八十人、先生が六人いる。

敵の数と比べれば、味方の多さは凄まじい。すき

だが、それはあくまで一丸となつて戦えばの話で、さっきのA組の連中みたいに今ここにいない者もいれば、ここにいる面子だつて教室や廊下にバラバラに散開していたりする。

下手に声をあげると、纏まつて戦力にするどころか、逆にパニックを起こして足手まといになるだけのような気もする。

「基本的には他の奴が攻撃されている隙すきにやつつけ……」

俺が瀬木と久美子にそう言いかけたところで、その声

をかき消すほどの大きな声が響いた。

「みんな、助けてくれ。武器を持った敵が来るぞ！」

肩口をざつくりと斬られた男子生徒を抱えて、七海修一が駆けこんできた。

あの状態で仲間を抱えて逃げるだけの余裕があつたんだな。やっぱ七海は出来が違う。いつそ出来杉くんに苗字を変えたほうがいいんじゃないか。

だが、そこまでできるならどうして最初からこういう事態を考慮して、武器を持たなかったのかと思うが……。

まあ常識的に考えたらモンスターに襲われるなんて考えないか。RPGなんか慣れ親しんでいる俺とは、感覚が違うんだらう。

「よし、なんだか知らんが俺がやるぞおおーっ！」

七海副会長の叫びに呼応して、モップを持った図体の大きな男子生徒が駆けこんできた。

いきなり現れた化け物に躊躇ちゆうちよなく突っ込んでいくって凄まじい奴だ。

思い出した。こいつ、一年では有名な猛者だ。

超高校生級の巨軀きよくに、後ろに流した黒い総髪。

まるで古武士のような鋭い眼光。確か剣道部で、全校集会で表彰されていた。

県大会の個人の部で優勝したあとで、同じ部の上級生にやつかみで絡まれて、全員を一人で叩たたきのめしたって武勇伝の持ち主だ。名前は……なんだっけ。

「三上直継くんか！ 頼む！」
みかみなおつぐ

「任せておけ、副会長さん！」

そうだった。確か『無双の三上』とか恥ずかしい名前
で呼ばれてたな。クラスは、C組だったと思う。

どういうこたわりか知らないが、七海修一はたいてい
フルネームで話しかけるので、人の名前を思い出すのに
便利だった。

「こんな時に笑ってるなんて、ほんと余裕ね」

俺、笑ってたか？

でも、今まで倒すのが大変だとは思ってたが、ここに来
て勝てる流れが出てきたんだ。笑みぐらい浮かぶのも当
然だ。

「久美子。この流れなら行けるぞ。俺達も三上に加勢してやろう」

どうせ倒さなきやならない敵だ。それに、剣道部の三上が先頭に立ってくれるなら、対処のしようもある。

三上は、走りこんできた先頭のオークの喉元のどもとに思いつきりモップの柄を突き刺した。

卵が潰れるような音を立てて、オークが一撃で仰向けあおむに昏倒こんとうする。

凄まじい刺突。見てるだけで息が詰まりそうだ。

オークは叫び声をあげる間もなく咽頭部を潰されて倒れた。おそらく即死。

見事な突き技だ。さすが無双。

敵は少し息が上がっている。不幸中の幸いというべきか、七海達が逃げまわることで敵を走らせてバテさせることには成功していたのだ。

これなら、率先してモンスターに襲われて死んだA組の犠牲者も無駄ではなかったといえる。

俺は松明で子供ぐらいの背のゴブリンの顔を焼いてみた。

そいつが振り回してたのはショートソードだったし、ちよつと走っただけでバテてたのか、動きが鈍いので余裕だった。

松明の炎に、ジュツと音を立ててゴブリンの顔が焼ける。「ギイッ！」と甲^{かん}高^{だか}い声をあげて怯^{ひる}んだ。

そのまま松明でもう一度殴りつけてやったら、ショートソードを落としたので、あとは短い足に蹴りを入れて転倒させてから、思いっきり頭を踏みつけてやった。動かなくなるまで、頭を蹴り続ける。

なんだ、コイツら恐ろしい見た目ほど強くないじゃないか。

俺はショートソードを拾い上げると、ゴブリンの胸に突き刺した。普通の生物ならこれで死ぬだろ。

生き物をこの手で殺す感触は、なんとも言えない後味の悪さがある。

それに、緑色の返り血で、制服が汚れてしまった。「真城くん、よく殺せるね……」

少なくとも今は何かに躊躇している時ではない。

「瀬木、そんなこと言っでないで、お前も後ろから石でも投げてろ！」

俺はそう叫びながらも、普通の高校生にいきなり戦闘しろってのは無茶だなとはわかっていた。

突然ダンジョンに放りこまれただけでもパニックなのに、更にモンスターと殺しあえなんて無茶むちゃくちや苦茶だ。

初めての戦闘に少ない犠牲で勝てたのは、たまたま荒事に慣れてた三上がみんなを先導できたからだ。

そう考えれば、まだしも運が良かったといえるかもしれない。

「瀬木、お前はこの松明で照らしてくれ。弱いゴブリン

なら、松明の炎でも怯むぞ」

モンスターも火は恐れるとわかった。これを持ってれば瀬木は安全だろう。

「真城くん、ありがとう」

そうこうしている間に、久美子が拾ってきたモップでもう一匹のゴブリンを突き殺していた。

俺だって荒事には多少慣れてるつもりだが、三木直継も九条久美子も、本当にただの高校生かよ。

こういう時に、躊躇^{ためら}わず殺^やれる奴ってのは意外にいるものなんだな。

遅れてさらに残り二匹のオークがこっちにやってきたが。

七海副会長のお仲間がモップをたくさん抱えてやってきて、七海の指示でみんなで一斉に突きかかったので、モンスターを倒しきることができた。

これで、最初に出てきた五匹は倒せたことになる。やはり戦は数ってことか。

最初にモンスターの攻撃によって、A組の生徒は二人死んで、一人が肩をざっくりと斬られて重傷だそうだ。

怪我人はこのまま放置しておけば死ぬ。

そこで、自然と学生達のリーダーとなつた七海修一が呼びかけた。

「誰かが助けを呼びに行かなきゃならない。進める者で先に進もう」

七海修一の鶴の一声で、生徒から有志が選抜されて先に進むこととなった。

一声かけるだけでみんなが付き従う。こういうのを力リスマ性っていうんだろうな。

本来なら率先して動くべき先生達も、七海副会長の判断に任せきりになってる。

先生達は残ることにしたらしいが、俺達は七海副会長の戦闘集団に付いて行くことにした。

集団行動はあまり得意じゃないし、積極的に協力したわけじゃないが、どうせ前には進むつもりだった。

それに、まだ危険なダンジョンを独りで動く自信はない。集団で行ったほうが効率的だろう。

しかし、何か既視感^{デジャビユー}めいたものを感じる。

このダンジョンの構造、どこかで見た覚えがあるんだ
よな……。

そんなことを考えてると、瀬木が声を掛けてくる。

「真城くん、僕も一緒に行くよ」

「瀬木、お前は先生達と教室で待ってていいんだぞ？」

「真城くんも行くのに、僕が行かないわけにはいかない
よ」

罨^がが作動しただけで足を震わせていたほど臆病なのに、
友達^{がい}甲斐のある奴だ。

「じゃあ護身用にこれやるよ。持ってる」

「うん、ありが——こ、これちよつと汚い……」

瀬木は、ゴブリンの緑色の血に染まったショートソードを見て眉まゆを顰ひそめた。

「汚くても武器はあったほうがいいだろ」

「それはそうだけど。真城くんは？」

「俺はモップがある」

これでもゴブリンぐらいは殺せるからな。

他人のことなど知ったことじゃないが、瀬木ぐらいは守ってやろうと俺は決意を固める。

「私もいるわよ」

なぜか当然のごとく久美子も付いてくるが、お前の面倒は見切れないから勝手にしろ。

だいたい久美子なら自分の身くらい自分で守れるだろ。

そう思ってたら、久美子だけではなく他の女子達まで来てしまった。

「九条さんも一緒に行くんですね」

「よかった。私達だけで不安だったから！」

「一緒にがんばろう」

女子が三人も来た。かしま姦しい。

こいつらも七海副会長の戦闘集団に参加するらしい。俺じゃなくて、久美子を頼って近づいて来たんだろうけど。

死ぬかもしれないダンジョンに行くのに、お前ら本当に大丈夫なのか。

同行を断らないところを見ると、それなりに久美子と

仲の良い生徒らしい。

久美子が仕方なさそうに三人のことを説明する。

「みんな私と同じA組の生徒よ。メガネをかけてる長い

髪が無駄に胸が大きいのが佐敷さしき絵菜えな、活発な茶髪のポ

ニーテールが真藤愛彩まとう あや、大人しそうなボブ・ショートが

立花たちばな漑みお。一緒に行くからって、ワタルくんは誰とも仲良

くなる必要はないけどね」

俺に絡みつくように身体を寄せて耳打ちしてくる久美子。

「俺もA組の女子と仲良くするつもりはねえよ」

「あら、それは僥倖ぎょうこう」

俺はお前とも仲良くするつもりはないんだぞ、久美子。



ここに来てから段々久美子のスキんシップが過剰になっていく。

A組の生徒の前では大人しくしてるんじゃないの
かよ。

あと、いくら自分が無乳だからって「無駄に胸が大き
いって」って紹介は酷いだろ。

そう思って目配せしたら、□にしなかったのに伝わっ
たのかギロツと睨にらまれた。

「失礼ね。私だつてちよつとはあるんだから、それはワ
タルくんだつてよく知ってるでしょ？」

知らん。俺はそもそも女の乳の大きさなんてどうでも
いい。

寄つてきた女子は、久美子に負けず劣らずの美少女揃いだが、容姿なんかこの際どうでもいい。

ただでさえ危険なダンジョンで自分の身を守るのに精一杯な今、他人に関心を持って情を移すような真似まねをしたくない。ましてや女子とか、足手まとい以外の何者でもない。

それなのに、胸がデカい佐敷つて女子が話しかけてきた。

「あの、九条さんの彼氏さんですよね……」

「彼氏じゃねえよ！」

無視するつもりだったがつい怒鳴ってしまった。

「彼氏じゃないんですね……ごめんなさい」

怯えたような表情を浮かべて、ペコリと頭を下げる。
ほんと胸が大きいな。制服の上からでもデカいのがわかる。つてのは相当だ。スカートから覗く^{のぞ}太ももがムチムチしている。全体的に肉付きが良くて、グラビアアイドルみたいな女子だな。

「この人がF組の真城ワタルくんよ。私とは友達以上恋人未満って間柄ね」

久美子がなんか言ってる。

「恋人じゃねえし、友達かさえも怪しいところだ」
勝手に彼氏にされてたまるか。

もう一人の茶髪のポニーテールも声を掛けてきた。
こっちはこっちで、スラッとした感じのスタイルのイ

イ女である。

「まあまあ、しばらくは一緒に行くんでしょ。真城くんも、仲良く行こうよ」

確か真藤という名前の女子は、俺に手を差し出してくる。

「何のつもりだ？」

「握手だよ」

俺が仲良くする気はねえと手を振ると、強引^{ごういん}に握ってきやがった。

こいつはスタイルが良くて、何かスポーツをやってそんな雰囲気だが、それでも手は柔らかい女子のものだった。

「俺は知らない奴らの面倒まで見きれないからな」

「ははっ。私だっつてこう見えても剣道をやっっているんだ。男子に面倒を見てもらおうとは思わないよ。この子達ぐらいは、守ってみせる」

真藤はモップを青眼に構えて得意げに振ってみせる。

「……まず、他人より自分の生き残ることを考えろよ」

「忠告に感謝するよ」

俺の忠告に何を思ったのか、真藤は爽やかに笑ってみせた。

全くどいつもこいつも慣れ合いやがつて。

最後の一人、佐敷や真藤の後ろに隠れてじっと無表情でこつちを見てるだけの立花滯って女子だけが、絡んで

こないだけ一番マシだった。

※※※

「わあああああ！　愛彩ちゃんっ！」

むせ返るような死臭に、俺は息苦しさを覚えた。

俺の目の前で、白いセーラー服に赤い血糊ちのりがベツタリ

とついた女子生徒が泣き崩れていた。

顔には血痕が飛び散り、かけているメガネはひび割れている。

血まみれの女生徒は、さっきまで生きていた友達の遺体を抱きながら、何度も何度も名前を呼び続ける。

それは程なくして意味をなさない絶叫へと変わった。
俺は思わず目を背けた。

少女の絶望的な金切り声は、聞いているだけで気が滅^め入^いってくる。

泣き叫んでるのは佐敷絵菜で、その身体にべつとりと
ついているのは抱いている真藤愛彩のものである。

俺達の周りで最初に死んだのは茶髪的女子、真藤愛彩
だった。つい先程まで活発に動き回っていたのが嘘のよ
うだ。

彼女は最初に宣言したとおり率先して前に出て、仲間
達を守るためにモップを振るってモンスターと戦ってい
た。

そして、前から飛んできた矢に気がついて、咄嗟とつさに佐敷絵菜を守ろうと前に出たのだらう。

おかげで佐敷は助かったが、真藤は正面から流れ矢の直撃を喰くらってしまった。

たまたま近くにいた俺は、真藤の最後の「絵菜！」という叫びとザクツと頭蓋骨が砕ける音を聞いた。

額にぶつとい矢が突き刺さったポニーテールの女子生徒は、それでもヒュー、ヒューと笛が鳴るような声を出して生きていたが、程なくして息を引き取った。

だから言ったんだ。

こんな状況では、他人を助けようとする良い奴から死んでいく。

鋭く尖った鍔^{やじり}が頭の中まで貫通して、即死しなかったのはまだ運が良かったのだろっが、助からなければ同じだ。

いや、むしろ苦しんで死ぬ分だけ運が悪かった。

ここには高校生しかない。俺達には治療手段がないから、重傷者は手当てのしようもない。

俺は頭を斬られて死んだ坂本龍馬^{さかもとりょうま}も、こんな感じだったのかなとか不謹慎なことを考えていた。



「ジェノサイド・リアリティー
異世界迷宮を最強チートで勝ち抜く」
2017年7月15日発売予定!!
どうぞよろしく申し上げます!!